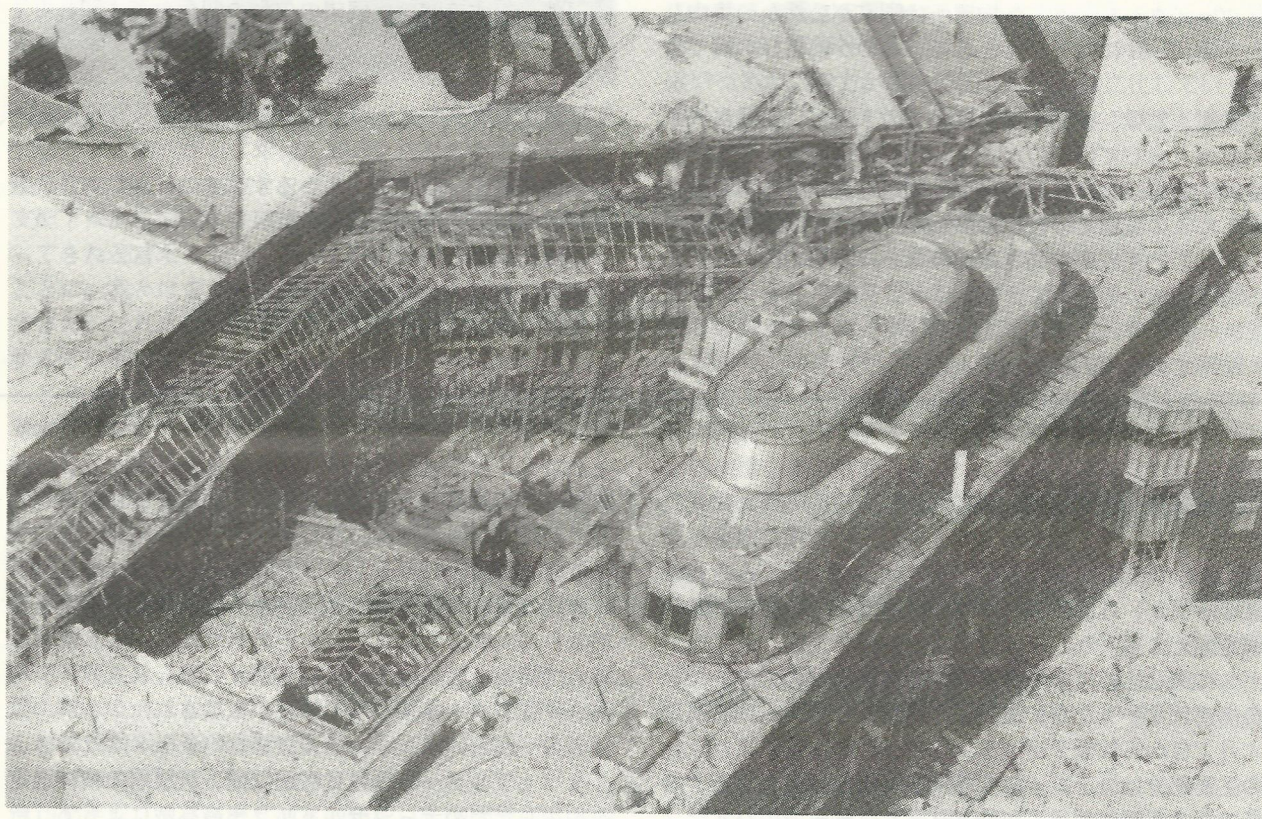


ドイツ赤軍派(RAF)武装闘争を再開 新設拘置所の施設を完全破壊！



1993年3月27日ヴァイターシュタット拘置所は完全に破壊された

3月27日、ドイツ赤軍派(RAF)カタリーナ・ハマーシュミット・コマンドは、4月1日から稼働が予定されていた新築のヴァイターシュタット拘置所を爆破した。強力な爆薬を効果的に使用し、拘置所の管理塔を中心とする主要な建物を完全に破壊して使用不能にした。

RAFは昨年の4月10日に発表した声明において、武装闘争の一時休止を宣言した。この声明では、獄中に長期にわたって囚われているメンバーの釈放のための闘いに主力を置くとして、武装闘争の一時停止によって獄中者についての政府の決断を見守る姿勢を見せていた。しかしながら、政府はたった一人の獄中者しか釈放しなかった。RAFの側から踏み出されたステップに対し、政府は獄中者の不当な監禁を続けるという姿勢で応えたのである。爆破攻撃当日に発表された声明文では、そうし

た現状～すなわち政府が獄中者への抹殺攻撃を停止しないということ～に対して、獄中闘争との連帯という視点から今回の攻撃が行われたことがうかがえる。

本号では、当日発表された声明文と、攻撃に関するドイツ国内でのマスコミ報道を中心として紹介する。この攻撃については、3月30日に長文の声明文も発表されており、これは次号で紹介する予定である。またこの拘置所の性格、なぜ爆破したのかということも展開していく。

今回の作戦の成功は、RAFの力量の大きさを十分に示すものであった。鮮やかな手際と大きな成果は、国内での排外主義政策の展開、さらには運動への弾圧を強めるドイツ政府への警告として、闘いの新たな地平を切り開くものである。革命闘争に、『妥協』は存在しないのだ。

(BURST CITY編集部)



ドイツ赤軍派(RAF)3.27声明

過去、我々の踏み出してきたステップでは何も変革はもたらされはしなかった。ステップとは我々が必要とし、求めていたものである。しかしながら我々は下からの社会的反権力のうねりの発展の渦中にある。その中から革命の変革へ向けた新たな契機が展望されうるのである。以前からもそうであったが、これは我々にとっての最優先の課題であり、今もって闘い抜かれねばならない。

昨年8月、我々はこれだけに責任を負わせることはできないとする文書を発表した。

ヴァイターシュタット拘置所は国家が公然かつ集中した矛盾にいかに対処せんとしているのかの格好の例である。

監獄、監獄、監獄—さらに多くの人民が、監獄に入れられようとしているのだ。—この監獄は国家の差別排外主義的収容政策の一翼を担う強制送還監獄でもあるのだ。そしてこの監獄での投獄に際しての隔離、選別化システムの技術的完成度の高さは他のヨーロッパ諸国のモデルともなっているのだ。

すべての政治囚に自由を！

監獄なき社会を！

解放への道は、社会的理解のプロセスの一部として巡っている。それは変革へ向けた新たな国際闘争の一部でもある。

国家とナチ勢力による人種排外主義と対決せよ！

社会闘争における人民内部の差別排外意識を解体せよ！

—たとえその社会闘争が我々の求める下からの大衆闘争であったとしても。—これは連帯、正義、貧困と社会的隔離に対する闘い、展望の欠如の問題に深く関わってくるものである。

プロイングスハイム、サンタ・フ、プロッツェンゼー、ラインバッハ、スタンハイム、ストラウビングの監獄で人間的尊厳をかけて闘っているすべての仲間に対し、我々はこの挨拶の言葉を送るのだ。

国際的獄中者闘争連帯！

Rote Armee Fraktion

カタリーナ・ハマーシュミット・コマンド

【ドイツマスコミ報道】

3月27日(土)早朝5時10分頃、未決囚のために新築されたヴァイターシュタット拘置所で大規模な爆発が起きた。マシンガンで武装した男3人、女2人とみられるグループが、外部からハシゴを使って高さ4メートルの塀を越えて侵入し、警備員と職員を縛り上げ、マイクロバスに閉じ込めたのち、管理塔を爆破したのであった。負傷者はなかったが、被害は1億マルク以上。拘置所は4月1日から稼働予定であったが、この爆破により建物の主要部分はコナゴナに吹き飛び、取り壊されるか、最低でも6年間は使用不可能となった。拘置所のハイテクを駆使した警備システムは稼働前でスイッチが入れていなかった。

犯行後、逃走に使用された車からRAFのシンボルマークのついた声明文(カタリーナ・ハマーシュミット・コマンド名)が発見された。またこの車は3月4日未明フランクフルト、フォッヘンハイムで盗まれたものであることが判明し、連邦検事局はこの車の写真とナンバープレートを公開して市民からの情報協力を呼びかけている。車は緑色のフォルクスワーゲンのバンで、ナンバーは「F-JP-787」。現場周辺は広範囲にわたって立ち入り禁止となっており、警察当局による徹底した遺留品捜査がおこなわれている。一方、この捜査には10万マルクの懸賞金をかけることも発表された。

カールスルーエ連邦検事局は、この爆破事件へのRAFの関与を示唆。またヘッセン州司法当局者は、「(犯行

は)周到な準備でなされており、明らかにプロの仕業」とのコメントを述べた。

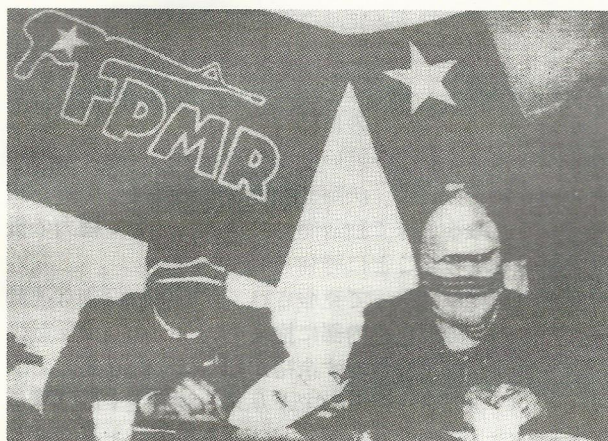
これが実際にRAFによるものとする、1991年ベルリン信託銀行総裁であったローベダー氏を暗殺して以来のことである。

昨年4月、RAFは「武装闘争」を放棄する声明を発表し、キンケル法相(当時)との「間接的和解」と報じられていた。この後5月に、重病だった元RAFメンバー、ギュンター・ゾンネベルクが釈放されたが、別の獄中者カール・ハインツ・デルヴォ、ハンナ・クラッペ、ルッツ・アルターら3名は数週間前、釈放前の精神鑑定を拒否したためデュッセルドルフ州最高裁によって「釈放却下」の決定が下されていた。このためマスコミなどではRAFがテロ活動を再開するのでは、との噂が流れていた。

同じRAF獄中者ブリギット・モーンハウプトは書簡で武装闘争をやめるように呼びかけていた。この書簡のなかで彼女は「武装闘争をやめることは私にとって現実的な展開にあわせた決定であり、また政治的責任をとることである」と述べていた。この書簡は27日付けのドイツ有力紙ビルトに掲載される予定だったが、奇しくも同日この拘置所爆破事件が起こったのだった。



FPMR(チリ) 8年間の闘い



1991年12月14日、マヌエル・ロドリゲス愛国戦線(FPMR)は結成から8年目を迎えた。1883年ピノチェト独裁政権支配下に結成されたFPMRは、とりわけ専制支配下において闘争を前進させ、運動の重要な役割を担ってきたと言える。12月14日という結成の日を祝うたびに、我々はまた過去の闘いの回顧と総括をおこなってきた。これはさらなる前進に向け、我々自身を対象化するという重要な作業でもあった。

FPMRの闘いの8年間で不屈の闘志とその社会的影響力に裏打ちされたものであり、革命的英雄主義と人間的、社会的変革に満ちあふれたものであったことははっきりと確認されねばならない。ただこの8年にわたる闘いの総括を一言で行なうのは容易ではない。1980年以降高揚しつつあった独裁支配に対する人民の闘いが最頂点に達する中で組織は誕生した。大衆闘争に導かれつつ我々は隣人、共同体、地域の全国的な闘いの偉大なうねりの中で誕生し、成長していったのだ。これらの闘いとは、例えばストライキなどの多種多様な闘争としてあった。これは1973年以降の専制支配に対して人民自らが終止符を打つため開始した闘いであったのだ。

1983年12月14日、FPMRの結成はこの国で何らかの変化が起こるのだという兆しであったのだ。つまり人民がその社会的存在の最も深い部分において、歓喜に満ちあふれつつ新たな闘いの武器を手に入れ、闘いの第一歩が踏み出されたのであった。独裁支配に対する闘いは、その最前線において鮮烈な形で起こることとなった。その中で我々は人民の武装勢力としてその戦闘性を打ち鍛え、築きあげていったのだ。数千にもおよぶ人民が独裁打倒の戦列に加わった。あらゆる社会分野、階級から男性、女性に加わった。すべてFPMRの領導する新たな闘争の陣形の中に、勝利の確信に満ちあふれつつ参加してくる者たちであった。人民大衆による戦闘行動の目ざましい勝利は、量的拡大もさることながら同時に質的向上も達成し、闘争の最高形態としての完成度を高めつつある。そして軍事機構やその他の活動機関などの組織が明け暮れてきた主導権争いの中で、従来の反独裁闘争に

不審を抱きはじめて人民の尊敬とシンパシーは、我々に注がれることとなったのだ。

我々のこの数年におよぶ果敢なる闘いにとっての主な課題は、当然ながらまずこの独裁支配体制を打倒し、再生不可能なまでに壊滅させることである。そしてこれは権力による重弾圧攻撃、国家テロや組織の「犯罪化」攻撃を断固としてはねのける闘いのうちに着々と成し遂げられてきたのだ。独裁支配にいかにもトドメを刺すのは容易なことではない。これは英雄的な闘いをさらに押し進めるなかで勝ちとられるものであろう。1983～86年にかけての我々の闘争は、独裁権力を震えあがらせ、経済、政治、軍事社会秩序のあらゆる分野で崖っぷちへと追いつめた。権力が国内、国外双方で孤立化していく状況へと追い込んだのだ。独裁権力は自らの敗北を自覚せざるを得ないまでに至ったのだ。

我々が1986年を「決定的な年」と定義するのはこの故である。闘いは最終局面を迎えつつあり、これによってもたらされる結果は先駆的なものであり、かつ大衆の支持を受ける中で勝ちとられることであろう。そして我々はこの数年にわたる闘いを通じて重要な役割を担ってきた左翼勢力の結集化の中で、進歩的民主主義へと到達するのである。一連の闘いの中で、キリスト教民主の率いる中道右派在野勢力を闘争の中に巻き込んだ。これは社会的支持を得るばかりでなく、わずかな期間のうちに起こった変革によってすでに危機に直面していた闘う部分に広範な支援を与えることとなった。この意味においては、キリスト教民主はファシスト体制に協力することから逆にそれを打ち倒すために民間のストライキや反政府運動、そしてこれまで左翼がイニシアチブをとる形ですすめてきた人民の抵抗闘争などを通して独裁反対派として闘争に一定程度加わったといえる。この構図においては2つの重要な要素が存在していると言えよう。

- 1) まずもって果敢な攻撃によって、社会のあらゆる分野における矛盾と危機をいっそう浮き立たせることで独裁権力の弱体化が成し遂げられたということである。
- 2) この強固な戦闘性と人民大衆の革命的暴力でもって左翼勢力が重要な役割を担ってきた偉大な統一的成果が勝ちとられたということである。この間、とりわけ民間の大衆集会と各政党との交渉の席が労働者自身の手によって設けられた。

大衆的勝利の可能性への息吹

この段階でアメリカは独裁に対するこの革命的闘争のもたらす結果と、差し迫った独裁崩壊の危機を予期せざるをえなくなっていた。これは中米においてはニカラグア・サンディニスタ革命やエルサルバドル、グアテマラの強力な闘いやこれら周辺地域におけるその影響力の拡大などの前例を見るまでもないことであった。

この脅威を感じたアメリカは数十万ドルを投じて、チリにおける運動の圧殺化攻撃を強化させたのである。この攻撃は政治、経済、軍事の分野はもとより、文化、司法、外交などの領域に対してもかけられることとなった。アメリカの目くろみとは、チリや中米全域にわたる帝国主義的権益の確保を狙ったものであることは明白である。またヨーロッパ諸国もまた同様の権益確保のために介入してきている。とりわけ、多くのNGO（非政府機関）が、人民の闘いの中に「仲介」の名のもと入り込んできたのだ。

「独裁権力の解体を平和的にすすめる」のを「支援する」ために投入されたアメリカドルの大流入でもって、それをくい止める役割を果たしていた運動の多くが買収されていった。この意味においてキリスト教民主や他の中道右派勢力は、ピノチェトや政府独裁機構の「罷免」を要求する活動を書類の上でおこなったのだと言えよう。書類上とは人民自身の手による解決、とりわけ革命といった観点からかけはなれたものであった。

アメリカは終始一貫してあらゆる大衆闘争とその暴力化、そして何よりもマルクス主義左翼やすべての革命的勢力をひとまとめにしてすべて「テロリスト勢力」と呼んだのだ。中央集権主義者はこの時期、とりわけ学生層のレベルで戦略の歩を進めていた。これらの屈辱的な要求は、キリスト教民主によって代弁された。これは以前から何度も明らかとなってきたように旧来からの権力欲によるものであことは明白であった。

「マルクス主義者」とされた大統領候補サルバドル・アジェンデの選挙での勝利を阻止すべく、1964年すでにCIAを通じて数百億ドルもの裏金がアメリカからチリへと流れていたのだ。1973年アジェンデ政権が倒された時、キリスト教民主勢力はファシストのクーデターを支援するばかりでなく、チリ人民をその流血の中に沈める手助けをおこない、クーデター軍事政権によって権力の分け前にあずかろうと画策していたのだ。

1986～87年の法制定により、共産党とMIR、そして同時に理論的、政治的軍事組織グループの弾圧もおこなわれた。この過程で、多くの日和見主義者、そして「伝統ある」チリ左翼の率いる勢力にとって、この「民主化への協調路線」なるコトバが金科玉条のごとく唱えられるようになったのだ。彼らは独裁権力とこれらの合意事項を交渉し、以来「対話路線」なるものを反独裁の闘争におきかえる形で全面に押し出してきたのである。我が人民はこのような政治的カケヒキに断固としたNOを突きつけ、独裁権力を絶対に打倒するのだといった地平に立ち、1986年の偉大な闘いへと前進していったのだ。

この年の7月2～3日にかけて闘われたゼネストは、まさに偉大な闘争として記憶に新しい。この時体制は人民の闘いを圧殺するため犯罪的国家テロリズムでもって応えたのである。たとえば南サンチャゴのマミーニャ通りで起こった活動家一家皆殺し事件などは忘れることはできない。またエスタシオン地区では青年2人を生きたまま焼き殺すといった許しがたい事態も起きている。権力は翌8月、武装勢力の弾薬貯蔵庫を摘発したが、これによ

って解放闘争を闘う勢力の存在に愕然とし、震撼したのであった。そしてこれをFPMRと結びつけ、弾圧の口実として現代版「魔女狩り」が開始されたのだ。また9月7日にはFPMRによる独裁者暗殺のための「20世紀作戦」が実行される。マイボ峡谷での独裁者らのパレードへの待ち伏せ攻撃によってFPMRの偉大な闘いは実行されたのだ。

ここで紹介してきたのは闘いの一例にすぎないが、この他にも数千にも及ぶ闘いが独裁支配権力に対して闘われてきている。この「決定的な年」の諸課題への取り組みの中で、ある意味で独裁側への脅威、そして権力の後退局面をもたらすことに勝利した。

旧来の左翼は今もって克服されてはいない深刻な運動解体の危機と分裂化を内部に抱えていたため、反独裁の立場を断固として貫き通す余裕がなくなったと言える。残念ながらこのまっただ中でキリスト教民主や同盟関係にある勢力が政治的リーダーシップをとることを容認してしまったのだ。1980年、ピノチェトの非常大権の発動によって多くの組織、機関は、これら独裁側と妥協して交渉のテーブルにつこうとして屈伏し、この結果17年にわたって続けられてきた独裁支配のさらなる強化を許すこととなってしまった。

我々の組織は犯罪者ピノチェトによるこのような欺瞞的体制、欺瞞にみちあふれた憲法などをけって受け入れはしない。帝国主義との合意によって生まれた「民主主義」、あるいは1973年クーデターと同様の状況下で語られる「民主主義」なる政府のデマゴギーをもまた我々は認めはしない。

強権支配システム：独裁国家

このようななか導入された合意・対話とは、真の民主主義の成立などとはほど遠く、まずアメリカの権益が最優先されていたのだ。ネオリベラルの経済モデルとはこれらの権益を確保し、血と弾薬によって貫徹される独裁支配システムを補強するモデルであったのだ。このシステムを戦略的に運用させつつ、国家は21世紀への生き残りを図らんとしているのだ。この過程で支配システムによる資本主義の新展開としてたちあられる支配勢力に有利な分野、例えば多国籍企業、経済支配勢力、軍事的プレゼンスをもつ勢力などの分野で、政治的、階級的断断化がおこなわれるのだ。これは独裁権力が軍部と各国家機関の支配権を依然掌握していることを物語っている。

この年、9ヶ月間で起こった「民主主義の進化」なるものの正体は、日々一層強化されつつある弾圧という事実を前にして徐々に明らかとなってくるのである。そして最後に大統領パトリシオ・エルウィン自身、「民主化への移行」は終了し、理論的に現在残されているのは、唯一それを確立する作業であると昨年8月に述べているのだ。





FPMRの躍進

この8年間に我々は数々の偉大な戦闘経験を蓄積することができた。我々は都市部において、あるいは郊外にあっても同様に、実力武装闘争を遂行してきた。その一つはFAMAE（経済封鎖を無視してハンガリーからクロアチアへ武器弾薬を大量に売却しようとしていた組織）を指揮していた将官カルロス・カレーニョの誘拐であった。のちに、彼はブラジルのサンパウロで釈放される。

（訳註／つい最近カレーニョはチリ国内のある河川敷で死体となって発見された。身体には拷問を受けた跡があり、数発の銃弾が打ち込まれていたという。ウルグアイの新聞ブレチャ紙によると、いまのところこの事件の犯行声明などは出されていないが、おそらく先のクロアチアへの武器売却事件にからんだものであることは明らかである、とコメントしている）これら実力武装闘争の軍事展開や他の戦闘形態は別として、この数年間に我々は一般の社会活動分野でも展開してきた。そしてこれは活動周辺地区の人権運動等とガッチリと結びつきた国際分野では外交的つながりも拡大している。

組織としては、我々はチリ人民の武装勢力として登場しつつ、1987年以来政治的／軍事的組織への飛躍を着々とばかりつつあり、現在もこれは非法法で闘いとられている。変革へ向けた第一ステップは、1987年後半からの綿密に計画されつつ進められていた政治的基礎の再構築であった。

1988年までに我々の政治方針と行動は、全国規模での人民の蜂起といった展望を打ち出したことに集約される。これを我々は「愛国、そして民族戦争」（P&N・W）と名づけた。具体的には88年10月21日をもってこの闘いの号砲が鳴らされることで開始された。この闘いで、セシリア・マグニ、ラウル・ペリーニ、タマラ、ロドリゴの4名の同志が闘争のために英雄的にその命を捧げたのであった。分断された先駆の勢力や組織を合流させ、人民とともに前衛組織として築きあげていくことが我々の党建設の任務として展望されている。

先に述べた我々の戦略路線「P&N・W」は「民族の尊厳のための愛国的闘争」（PSND）戦略への発展をもって1990年の戦術的飛翔が獲得されたと言える。この年の9月、我々は「民族の尊厳宣言」を発し、我々の立場と当面の戦略を明らかにした。のちこれは「現状の分析」文書としてまとめられ結びが加えられた。

現在のチリ政府に対する我々の分析作業が継続的に正しいものであるという事実は認識しつつも、我々には新たな現実と政府側によってつくりあげられてきた領域に対して柔軟さを持ちつつ立ち向かっていく姿勢が欠けていたといえる。これは民主主義の分析に戸惑う中で、とりわけ組織、軍事、戦闘戦略のレベルでの我々の活動の内に停滞状況をもたらすものとなり、指導部層は1991年1月、ロドリゲス主義者協議会IRCの開催を呼びかけるにいたった。この協議会では現在の支配システムに終止符を打ち、我々の社会革命プロジェクトを成功に導くために現状を深く分析し、変革のための指針が明示されたのであった。そして今日、これらの変革はしっかりとした基盤づくりと絶えまない総括作業の中で着々と遂行されつつあるのだ。

ロドリゲス主義：そのイデオロギー的源泉

我々にとっては愛国主義がイデオロギーの支柱となっている。そこから我々は誇りある民族、あるいは人民のすべての歴史的基礎を掘り起こしていくのだ。これはボリバル、サン・マルティン、マルティなどにみられるようなラテン・アメリカニズムとして起こった革命的国際主義の骨格を成すものである。我々はキューバ革命、そしてサンディニスタ革命に学び、大きな影響を受けている。我々は科学的社会主義を理論分析の支柱とし、さらに行動の指針として基盤に据えている。尊厳と敬愛に基づくヒューマニズムと倫理的価値についても忘れてはならない。言行一致、個人重視、忠誠心、誠実さ、連帯の精神なども同様である。

我らが同胞のうちにつちかわれたロドリゲス主義の神聖性は実践と原理に基づいており、革命的価値観は歴史の最も英雄的かつ献身的な領域であった。我々の同胞たちは、その多くがいまもって政治囚として捕らえられている中、監禁と拷問に耐えつつ人民への忠誠心の高さを実証した。我々の英雄たちが思いおこされる。自らの生命を我々の目的のために捧げたすべての愛国戦士たち。

カミリオ、タチアナ、マルセロ、パトリシオ、マルガリータ、バレリアーノ、モイセス、ホセ、イグナシオ、セザール、パト、エリザベス、エスター、ラウル、セシリア、ロベルト、エルナン、カルロス、マウリシオ。

我々の革命的任務を前進させ実践するために彼らは自らの尊い生命を捧げたのである。

我々は、我々をもっとも人間的かつ道徳的な基礎で打ち固めてくれたこれらの愛する名前を忘れることはできない。彼らのために、そしてまた我々の人民のために、あるいはまた我々の思想と革命闘争のために、次のスローガンを最後に掲げておこう。

「勝利か、死か！」

News Briefs

【ニカラグア】

92年11月23日、フェルザス・プニトバス・デ・イズキエルダ（左翼による懲罰部隊／F P I）と名の組織がニカラグア北西部の街レオンで、反動的企業重役アルヘス・セギーラを暗殺。セギーラはF S L Nの土地解放政策によって接収された土地を再び元の「所有者」に返還するための団体「土地回収協会」の理事を務めるなどしていた。F P Iが声明を発表するまでの間、企業連合会会長ラミロ・グルディアンは、この暗殺はサンディニスタによるものとのキャンペーンを展開していた。

F P Iは2年ほど前に結成された組織で「反帝闘争を闘うマルクス・レーニン主義組織」として自らを位置づけている。92年10月12日、マナグアのアメリカ大使館付近での2件の爆破事件ではF P Iが声明を発表し「飢えに苦しむ人民をもてあそび、国内不安を一層強化させて

いる政治家に対しては今後も暗殺攻撃を継続する」と宣言していた。またセギーラ暗殺直後「F P Iは『サンディニスタ革命の勝利』を防衛し、反動的政治家、企業に対してさらなる攻撃を加える」との声明を発表。

【アルゼンチン】

結成されてから間もない組織、人民の革命機構（O R P）はカルロス・メネム政権粉碎キャンペーンを開始することを発表した。O R Pは国有石油会社の民営私企業化計画粉碎をきっかけ、92年10月29日、同公社に爆破攻撃を敢行。またこれより以前には銀行2ヵ所に対する爆破や小包を使用した爆弾による連続戦闘もおこなっている。

O R Pは人民革命党、母なる大地の運動（M T P）から分岐した組織である。M T Pは熾烈なゲリラ戦闘を闘うグループとして知られており、89年1月にはタブラダでゲリラ部隊が国軍第4歩兵大隊に武装攻撃を敢行し、30時間におよぶ戦闘をくりひろげている。この際、ゲリラ、軍／警察部隊双方で40名以上の死者がでている。

【コルシカ】

92年12月14日、コルシカ民族解放戦線がフランスとコルシカの各地で連続24件の爆弾闘争。パリ、ニース、コルシカでは政府の税務財政関連施設を中心に同時多発爆弾戦闘が展開された。一連の爆破は、フランス政府が改悪税制を導入しようとしていたことに反対してのもの。

【デンマーク】

92年8月14日、コペンハーゲンでの銀行3ヵ所襲撃容疑で、反帝闘争活動家クリスティアン・スヴェッター、ステファン・クリンソイの2名が逮捕された。2人は各自24時間体制での監視隔離拘禁をうけており、面会も不当に妨害されている。またマスコミと警察が一体となり「テロリスト」キャンペーンがはられている。

【パレスチナ】

92年9月28日、イスラエル／ナハファ刑務所でパレスチナ人獄中者が獄中処遇改善を要求してハンストを決行した。他の4刑務所でおこなわれたイスラエル刑務当局との交渉結果をうけ、一応の終息をみた。ハンストに決起した獄中者フサイン・ニナール・アビダットはこの前日に死亡している。

GRAPO獄中者への 隔離拘禁を許すな！

GRAPO（反ファシズム10月1日運動）メンバーのホアン・マヌエル・ペレス・ヘルナンデスは、スペインにおいて政治囚として投獄されている。

彼は獄中で435日間にわたってハンガーストライキを闘い抜いた。現在、極度に衰弱し生命の危険があるにもかかわらず、隔離拘禁されている。

ともにハンストを決行した数名の獄中者らは、約1年前から監獄内での獄中者の団結権を要求していたのだった。ハンスト決行者に対しては、手錠でベッドに縛りつけたまま食事を口から流し込むという行為がなされた。この他、看守による殴打、暴行などにより後遺症に悩まされている者もいる。

ヘルナンデスは、ハンスト決行中あるいは終了後何度も心臓発作に襲われ、脳障害も併発している。現在彼は他の囚人とは別々に監禁されており、その隔離拘禁攻撃は彼の精神的孤立感を増幅させるものとなっている。

別の政治囚バルモンによると、「彼は超人的な獄中闘争を継続しつづけた結果、神経が消耗し、精神的に崩壊しはじめるという状態にある。我々はなんとしてでも彼の釈放を勝ち取らなければならない。これは人間としての連帯の義務である」。

彼の精神状態は、反動的獄中処遇攻撃下、日々悪化しており、連帯と支援が早急に望まれる。極度の肉体的、精神的疲労困憊状態におかれているヘルナンデスの釈放を要求する手紙をスペイン政府法務大臣宛に送っていた。

※送り先・スペイン政府法務大臣

SR Ministro de Justicia.

C/ San Bernardo, 45

28015 Madrid SPAIN

世界の革命運動の情報紙

 **BURST CITY**
For Revolutionary Resistance

★発行 A. R. P

★連絡先 〒606 京都市左京郵便局私書箱57号

AR P

★定期購読料 10号分 2500円 今号 150円